

初恋のイケメン従兄いとこが  
オス全開の独占欲で私に迫ってきます

1 『なんでもいうことをきくけん』を持った従兄いとこがやってきた

華金はなきんの夜といえど、私のこちんまりとした1Kの部屋はいつもどおりで、どこにも浮かれたところはない。  
ろはなかった。

明かりをつけて、靴を脱いで、スーツをかけ、部屋着に着替えて、意味もなくスマホを開く。  
「あれ、着信があつたんだ……」

画面をタップして着信履歴に表示された文字を見た瞬間、省エネモードでダラダラと動いていた身体と心が一気にフル稼働で動き出した。

画面には【藤道秀一とうどうしゅういち】の文字。——六つ上の従兄いとこだ。

慌てて折り返しかけて、ドキドキしながら電話の呼び出し音を聞く。

呼び出し音が切れて、低くて、艶つやのある声が聞こえてきた。

『——もしもし』

たった一言。それなのに、まるで耳元で話されているかのような声に、息が詰まった。  
心臓に悪すぎる。

『真白ましろ？』

「——秀ちゃん」

『元氣か?』

フツという笑いを含んだ吐息にすら男の色香がのっている気がして、電話越しなのに顔が茹<sup>ゆ</sup>る。本当に、ズルい。

「元氣だよ。それより、どうしたの?」

今が金曜日の夜の九時半だから、ニューヨークは金曜日の朝の八時半。これからお仕事のはずなのに。

『いや、日本に帰れることになったから報告しておこうと思って』

「え、ほんと? いつ?」

『来月』

「うそ……!」

『そんな嬉しい?』

「嬉しいよ、二年ぶりだし……」

『へえ』

ドキドキして言ったのに、へえって!

相変わらずの脈のなさにがっかりする。

まあそれもそのはず。平凡顔のド庶民の私と違って、彼はイケメンエリート、実家は資産家という、普通に生活していたら私とは縁のない男性なのだ。

『……なあ、お前って確か職場の近くに一人で住んでたよな』

顔面・能力・資産——現代版身分差とも言えるそれらを改めて認識してため息をついていると、秀ちゃんが突然、変なことを尋ねてきた。

「ん? うん、そう。一人で住んでるよ。それがどうしたの?」

『頼みがあるんだけど』

「なあに?」

『家が決まるまで、しばらく住まわせてくれない?』

「え。でもうち狭いよ。秀ちゃんの実家の子ども部屋のほうが広いぐらいだよ」

『別に大丈夫』

「1Kだよ」

『へえ』

「駅からも距離が——」

『平気だって。それよか、お前、今、彼氏いる?』

え? 彼氏?

「彼氏は……今は、いない、けど」

本当はいたことがない。つい、いらない見栄を張ってしまったけど、私は年齢<sup>イール</sup>に彼氏いない歴の堂々たる処女<sup>おとめ</sup>だ。

『今は?』

一段低くなった声にびくつと肩が跳ねた。

『お前、あれからコンパとか行っただんじゃねえだろうな』

『い、行つてない！ あれからは一度も行つてないよ！』

『そう、ならいいけど。彼氏いないなら一緒に住んでも問題ないだろ？ じゃあ、頼んだからな』

『え、ちよっ!?』

『仕事が始まるから切る。またな』

『ちよっ、秀ちゃ……!』

プーッ、プーッ、という機械音が虚しく耳に響く。

『え……ちよ、本気?』

確かに彼氏はいないけど、いい年をした男女二人が一つ屋根の下とか問題しかないんじゃない?

サツと1Kの部屋を見渡す。

シングルベッド一つにローテーブルとクッション二つ、そして、ウォークインクローゼット。一応、二人入居可の物件とはいえ、男女二人で住むにはどう考えても狭すぎる。いや、それよりも秀ちゃんとここで少しの間一緒に住むとか。

——真白の作るご飯、美味いな。

——なにしてるんだよ、いいから一緒に寝るぞ。

——真白、このままずっと俺と一緒に暮らさないか。

ぎゃあああ! と叫び出したいのを堪えながらベッドの上で枕を抱いてのたうち回る。

「ヤバい、空が白んじてきたよ……」

色んなパターンを想像しては悶えてを繰り返しているうちに、外が明るくなってきてしまつた……

これはもう無理だ。二十年間初恋を拗らせた女に『好きな人と同居』というTLコミックのような衝撃展開は耐えられない。本当に同居したら連日連夜眠れないに決まっている。

非常に、本当に非常に、垂涎ものの超絶魅力的な提案だったけど、これはやはりきちんと断るしかない。

そう思つてスマホを開くと、メッセージアプリに秀ちゃんから一枚の画像と【居候の件、よろしく】という一言が届いていた。

アプリのトーク画面に表示された画像——古ぼけた小さな紙の写真を見て凍りつく。

見覚えのあるその小さな紙は、私の黒歴史の一ページを飾る『なんでもいうことをきくけん』だった。

心臓が嫌な音を立てる。

小さな紙に色鉛筆で書かれた拙い文字。

“なんでもいうことをきくけん”。

私がこの悪魔の券をこの世に生み落としたのは、小学校一年生のときだった。

私は初恋の相手である秀ちゃんに自分の作つた『なんでもいうことをきくけん』を無理矢理に押しつけ、代わりに秀ちゃんにも無理矢理『なんでもいうことをきく券』を作らせた。そして、

ちゅーを迫った。

ごねて、ごねて、ごねまくり、最終的に泣き落として秀ちゃんに、無理矢理ちゅーをさせた。初恋の格好いいお兄さんにちゅーをしてもらって、ドキドキした幼き日の素敵な思い出は、同時にパワハラ、セクハラ、痴女行為のスリーコンボを決めた最悪の黒歴史でもある。

「……っ」

枕に顔を押し付けて悶絶する。

黒歴史というものは、どうしてこんなにも的確に自分の心に深手を負わせるのだろう。どうして人は後に自分を苦しめることに気がつかずに黒歴史を作り、自分で自分を痛めつけるのだろう。ジーザス。

【居候の件、よろしく】

完璧に整った顔にニヤニヤとドSな笑みを浮かべた従兄の姿がありありと目に浮かんで——格好よすぎてニヤけた。ってそれよりも！

「こんな物騒なものを、どうして未だに持つてるのっ！」

っていうか、まさかとは思うけど、こんな物騒なものをアメリカまで持っていったの!? そんなあのときのことを根に持っているの？ だとしたらかなりヤバイ……

「でも、まだ持っていてくれて嬉しいとか思ってしまう」

秀ちゃんは思い出とか恨みとかじゃなくて、『いつか使える』と思って今まで持っていたんだろうけどね。そういう人だから。でも、根はすごく温かくて面倒見がよくて優しいから、男女問わず

人を惹きつけるのだ。

ゴロンと寝返りをうって、目を閉じる。

私は子どもの頃、頻繁に祖父母の家に預けられていて、そこで秀ちゃんに会っていた。

うちの両親は、二人でよくデートや旅行に行き、私の学校行事にも二人で参加するオシドリ夫婦で、近所の人たちも、家に遊びに来た友達も、家庭訪問に来た先生も、うちの両親を見ると「素敵な家族だね」と異口同音に評した。

でも、皆から見た、その『素敵な家族』の中に、私は入っていなかった。

私は、子どもの頃、両親の旅行やお出かけに、一度も連れて行ってもらったことがない。

いつだって、私は祖父母の家でお留守番だった。

両親はお互いをすごく愛していて、二人の世界が昔から確立していた。だから、私への愛情と関心は希薄だったのだ。

『お母さんたち旅行に行くから、迎えに来るまでいい子で待つてるのよ』

「おいていかないで」とも、「いっしょにいきたい」とも言わなかった。

私のその一言がおばあちゃんとお母さんの間で酷いケンカを招くことも、結局は両親が私を連れていってくれないこともよくわかっていたから。

『わがままを言って、おばあちゃんたちを困らせたらだめだからね』

うん、と頷く。

『真白はいい子だから、できるよね?』

うん、ともう一度願く。

『じゃあ、行ってくるから』

『ましろ、いいこでまってるから』

——だから、ぜったいに、迎えに来てね。

遠ざかっていく両親の後ろ姿と、小さくなっていく車をいつも涙を堪えてじっと見送っていた。

泣いたら、おばあちゃんたちが私のためにお母さんたちとケンカするから。両手を握りしめて、絶対に泣かないように堪えて笑顔で手を振っていた。

わがままを言わないように、手がかからないように、自分なりに一生懸命にいい子で待っていた。でも、いい子で待っていても、お母さんとお父さんは約束した日に帰ってこないことも多かった。そういうときは本当に怖かった。

両親がお互いを想うようには、自分が二人から愛されていないことも、むしろ自分が二人にとって邪魔な存在であることも、幼いながらにわかっていた。

だからこそ、両親が帰ってこない、もう迎えに来てもらえないんじゃないか、ついに捨てられてしまったんじゃないかという考えが現実味を帯びてきて、一人でよく泣いていた。

今になって思うと、そんな私のことをおじいちゃんとおばあちゃんもわかっていたから、私が懐いている従兄の秀ちゃんを家に呼んでくれていたんだと思う。

隅っこで一人うずくまって泣く私を、秀ちゃんはいつも見つけ出して、優しく頭を撫でてくれた。心細くて不安で寂しくってしょうがないときに、超絶格好いいお兄ちゃんに甘やかしてもらって、

優しくしてもらって……、私は当然のように恋に落ちた。

物心ついたときには好きだった。いつも優しく手を引いて歩いてくれて。親には言えないわがままも聞いてくれて。一緒に遊んでくれて。勉強を教えてくれて。

格好いい秀ちゃんは子どもの頃の私にとっては完璧な王子様であり、ヒーローだった。

秀ちゃんがいてくれたから、私の子どもの頃の思い出は色鮮やかなものになった。秀ちゃんが隣にいてくれたから、寂しいとは思わなくなった。笑っていられた。生きていられた。いい子になりたい、素敵な女性になりたいって思えて頑張れた。

「二年ぶりか……また格好よくなってるんだろぅな」

同居なんてびっくりしたし、恥ずかしいけど、それ以上に嬉しいのも事実で。

ベッドの上で顔をだらしなく緩ませながら、ごろごろと幸せにのたうち回って週末を過ごした。

\* \* \*

「木之下さん、これ、相続人を見落としてる。悪いけど、相続関係図を作り直してくれる？」

「えっ」

「ほら、ここに認知って書いてあるでしょ」

ギシッと椅子に体重を預けた日高先生が悪の親玉のような顔に笑みを浮かべる。どう見ても堅気に見えない、このいかつい人が、この日高司法書士事務所の所長であり、私の雇用主だ。

その太い指が指し示す古い手書きの時代の戸籍に急いで視線を這わすと、確かに記載されていた。ちなみに、認知とは、結婚していない男女の間に生まれた子どもとの間で法律上の父子関係を成立させる行為をいう。

「やっちゃったねえ。もし、これで登記申請したら、却下か取り下げだね」

「申し訳ありません……!」

相続人を見落とすとか、本当に有り得ない。確かに被相続人が大正の生まれで、戸籍の量が膨大で相続人が二十人以上いたとしても、それは言い訳にならない。

しょんぼりと項垂れる。

大学で法学部に入った私はせっかく法律を勉強するならダブルスクールをして、大学四年生のときに司法書士試験に合格した。そして、研修を終えた今年の五月からこの日高司法書士事務所働いている。資格取得のための勉強はすごく大変だったけど、ニューヨークに行ってしまつて会えなくなつた秀ちゃんへの想いを勉強への情熱に変えて、必死に勉強したのだ。

ちなみに、司法書士とは土地・建物や会社の登記をはじめ、相続、後見など、法務局や裁判所に対する手続きの専門家。

幸い試験には合格したものの、受験勉強と実務は全然違つて、毎日勉強と失敗の連続でへこみ続けている。

「そんなに落ち込まないで。まだ働き始めて間もないんだからしょうがないって。十分よくやつてと思うよ」

自分の席に戻ると、隣の席の先輩司法書士が微笑みながら励ましてくれた。色素の薄い髪に優雅な目元、スツと通つた鼻筋、シャープな輪郭、引き締まつた口元。細身のスーツをスタイリッシュに着こなす文句なしのイケメンだ。

「さすが、『王子』は優しいねえ」

「その呼び方はやめてくださいって」

苦笑いを浮かべているのに、洗濯洗剤のCMのように爽やかで眩しい。私の教育を担当してくれている伊吹颯太さんは私よりも三つ上の二十六歳で、優しい雰囲気とその甘い顔立ちから取引先会社の女性たちに『王子』と呼ばれている。

「いいか木之下、男はな、こういうイケメンじゃなくつて、頑張つて雰囲気でイケメンっぽく振る舞つてるやつのほうが絶対にいいからな。イケメンは顔に胡坐をかいて成長を止めているやつが多いから」

「木之下さん、いい年したおっさんの僻みつて醜いよね」

「自分がイケメンだってことを否定しないところがムカつくよな」

「そこを否定してもいつも突っかかってくるじゃないですか」

二人の定番のやり取りに噴き出す。

よし、と気持ちを奮い立たせて、もう一度パソコンと書類に向かった。

——相続人、見落としてるよ。

——あんだ司法書士でしょ？　これくらいパツと答えてよ。

——こんなに若い女性で大丈夫？　ベテランの男の先生がよかったな。

今日あった出来事を思い出し、家に向かってトボトボ歩きながら、周りに気づかれないように深いため息を零す。

社会人一年目。働き始めて一月とちよつと。覚えることも勉強することも多くて、とにかくがむしやらに与えられた仕事をこなす毎日は、正直言つてかなりしんどい。

電話対応ですら緊張するのに、一步事務所の外に出れば『先生』なんて呼ばれて、プレッシャーで胃は痛いし、言葉巧みに不動産の営業マンから仕事を押しつけられるし、税金について聞かれてすぐに答えられなくてへこむし。——税金に関しては税理士さんの職分で、司法書士が答えたら税理士法違反になるとはいえ、その一言でバツサリ切り捨てられるわけにもいかないのが辛いところ。税理士さんみたいに詳しくある必要はないし、はつきりと答えちゃいけないけれど、せめて税務署が発行しているパンフレットに沿って一般的なアナウンスをして、詳しくは税理士さんに、ぐらい言えないと、顧客なんてつくはずもなく。

……こんなはずじゃなかったんだけどな。

働き始める前に思い描いていた社会人の自分は、もつと上手くやれていた。

仕事にやりがいを感じて、どんな難しい案件もこなして、キラキラ輝いて働いているはずだった。でも、そこにあったのは何者でもない自分だけだった。

司法書士だなんて大層な肩書を背負っちゃっているけど、実際は自分の至らなさや無力感に打ち

ひしがれて、相手の理不尽な言い分にへこんだり、悔しくなったり、泣きたくなったりする毎日だ。

家に帰っても、冷たい真つ暗な部屋が待っているだけだと思つと、ため息が漏れる。

涙で滲んだアスファルトの道をぼんやり見つめながら歩いていると、鞆の中でスマホが振動するのを感じた。疲れもあつて緩慢な動きで取り出したけど、画面に通知されている名前を見た瞬間に、背筋がシャキッと伸びた。急いでメッセージアプリを開く。

【荷物送るから住所教えて】

用件だけのメッセージ。それでも嬉しくて即座に返信すると、電話がかかってきた。

「秀ちゃん？」

『もしかして、今、外か？』

「うんそう。ちよつと、調べ物してて遅くなっちゃつて。今、帰つてるところなんだ」

『そっか、お疲れ。気をつけて帰れよ』

「うん、ありがと。電話なんかくれて、どうしたの？」

『単純に真白がどうしているか気になったただだよ』

「仕事前に？」

『仕事前に。案の定、元気なかったしな』

優しくて少し甘い声に、涙腺がさらに緩みそうになる。

いつもと変わらない態度のつもりだったのに、どうして、秀ちゃんにはわかつちゃうのかな。

嬉しくて、温かくて……、少し、困る。



『どうせ、仕事のことまでへこんでるんだろ』

「……どうしてわかるの？」

近況なんて全然話してないのに。

『社会人一年目なんてそんなもんだろ』

「秀ちゃんも、そうだった？」

『俺？ あんま記憶がねえな』

「物忘れ外来は早めに行ったほうがいいらしいよ」

『しばくぞ』

ふふ、と笑いが零れる。

「ニューヨークにいるのにどうやってしばくつもりなの？」

『帰ったら覚えてろってことだよ。めちやくちに泣かせてやるからな』

帰ったら、という言葉に胸が喜びで膨らむ。

秀ちゃんは仕事前であんまり時間がないはずなのに、結局私が家に着くまで通話を続けてくれた。

『社会人一年目なんて恥かくために存在してんだから、あんま自分を追い込むなよ』

「うん。ありがとう」

じゃあ、と電話を切って、足取り軽くアパートの階段を上る。夜空に浮かぶ半月がなんだかすごく綺麗に見えたりなんかして。さっきまでへこんでたくせに、すっかり浮かれて、我ながらなんて現金なんだろうと思う。

「色々頑張らないとなあ」

私は、要領もあんまりよくないし、頭の回転だって遅い。欠点だらけだってわかっている。でも、だからこそやらないといけないのだ。秀ちゃんに釣り合う女になって、今度こそ告白するためにも。

\* \* \*

秀ちゃんとの再会の日まで、平日は仕事でメンタルを削られたりボコボコにされたりしながらも踏ん張り、土日は秀ちゃんとの同居に向けて準備を進める。

お揃いのカップやお皿や箸置きを買ってみたり、歯ブラシと歯ブラシスタンドを買ってみたり、アメリカから届いた段ボール箱を見ては、本当に秀ちゃんがこの部屋に来るんだな、と同居の妄想に耽<sup>ふけ</sup>ってニヤニヤしたり……そんな浮かれきった生活を送っていた。

ついには小さな花瓶を買ってきて家にピンクのお花を飾り始めたり、「最近明るい色の服が多いね」と先輩の伊吹さんから言われたりと、脳内から溢れ出したピンク色が知らぬ間に外界にまで影響を及ぼす有様だった。でも、そんなことはどうでもいいと思えるくらい、私は秀ちゃんの彼女ごっこを満喫しまくった。

——そして、今日。ついに秀ちゃんが帰ってくる。

お気に入りの黒色のブラウスとジーンズ。脚が綺麗に見える華奢<sup>きゃしゃ</sup>なストラップヒールのサンダルとグリーンのペディキュア。そして、秀ちゃんから誕生日プレゼントでもらったネックレスとピ

アス。

最寄り駅の改札前で秀ちゃんを待つ。家で待っていると言われたけど、落ち着かなすぎて迎えに来てしまった。髪を弄<sup>いじ</sup>ってそわそわしていると、電車が到着して乗客がぞろぞろと出てきた。

「秀ちゃんだ……！」

秀ちゃんは大勢の人の中にいても、そこだけスポットライトが当たっているかのように目立つのですぐにわかった。

男らしく形のいい額。きりつとした眉と目。スツと通った鼻筋と引き締まった口元。漆黒の髪と強く光る黒い瞳が、抜群に整った顔を際立たせて、見る人を魅了する輝きを放っている。顔面だけでも破壊力がすごいっていうのに、一八六センチの長身とモデルみたいに長い手脚が存在感を爆上げしていて、とにかくオーラが半端ないのだ。

今だって黒いTシャツにジーンズという極めてシンプルな格好なのに、雑誌の表紙のように絵になっている。

「お帰り、秀ちゃん」

周囲の女性の視線という視線をことごとく奪っている彼が、私のほうを見て口角を吊り上げる。

「ああ、ただいま」

ギョんツと悲鳴を上げる心臓を抑えた。やっぱり、半端なく格好いい。二年前よりも自信と男の色気が増していて、もう全然太刀打ちできる気がしない。

「悪いな、無理言って」

「ううん、頼られて嬉しかったから気にしないで」

ぱち、と不思議そうに瞬<sup>まばた</sup>きをした美形に微笑む。

「あの秀ちゃんに頼ってもらえるほど、私も大人になったんだあって」

「そういうことな。確かに、あの小さかった真白が働いて独り暮らししてるとか感慨深いよな」

シミュレーションどおり『大人になったアピール』が成功して、へへっと笑ったところで、スーツケースの上にのせられた手荷物が目についた。

「荷物持とうか？」

「お前に持たせるわけないだろ」

呆れたような顔で言われて、しゅんと気落ちすると、ポン、と大きな手が頭に置かれる。なんだかその感触が不思議で、瞬<sup>まばた</sup>きをして秀ちゃんを見つめ返した。

「どうした？」

小さな頃からこうしてたくさん撫でてもらってきたけど。社会人になった今は……ときめく以上に、込み上げてくる不思議な感覚があった。

社会人として働き始めたら、誰かに守ってもらえることなんかなくて。日々、司法書士の『先生』として相応<sup>ふさわ</sup>しいように、見下されないように、自信のあるふりをして振る舞って。仕事を押し付けられたり、ミスや責任を押し付けられたりするたびに強くなきゃって頑張って。傷つきたびに傷つかないようにしようって何重にも何重にも鎧<sup>よろい</sup>を身に着けて。

そうやっていつの間にか積み重ねた重たいものが、パキパキと音を立てて剥<sup>は</sup>がれていくのを感じ

じた。

「なんだろう……、たぶん、今、私、ものすごく安心してるんだと思う……」

『ここなら、もう誰にも傷つけられずにすむ』『守ってもらえる』——そういう絶対的な安全地帯に戻ってこられたかのように感じて、身体からへなへなと力が抜けていく。

「なんだそれ」

「知らないうちに神経を張り詰めて日々過ごしてきたんだなーって実感した」

秀ちゃんはなにか言いたそうな顔をしたあと、私の頭をガシツと掴んだ。

「えっ、痛っ!？」

なにに!? と目を白黒させていると、グイツと引き寄せられて頭上から温かい声が落ちてきた。

「あんま、自分を追い込むなって言っただろ。……頑張ったな」

小さい子にするみたいに頭をよしよししながらの囁きに呼吸が止まる。

手が私の頭から離れて。

顔を上げた先にある秀ちゃんの笑顔に、今度は心臓まで止まった気がした。

顔が熱い。胸が苦しい。言葉が出ない。

さっき感じた絶対的な安心感なんて簡単に吹き飛ばされてしまう。

私、どうして再会したら手が届くだなんて思ってしまったんだろう。

やっぱり小さい頃同様、距離は縮まらないままだ。

タクシーに乗ると、あっという間に家に着いてしまった。

片想い歴だけが無駄に長くて、恋愛経験値が底辺の自分としては、男の人を自分の部屋に上げるというだけでも妙に気恥ずかしさを感じる。

「狭いけど、どうぞ」

ドキドキしながらドアを開けたのに、「お邪魔します」と言いつつも、まるで自分の実家に上がるように自然と上がっていく秀ちゃん。そこに恋愛の猛者の背中を見た。

「よかったらその辺に適当に座ってね、コーヒー淹れるから」

「おー、サンキュ」

秀ちゃんは黒いトランクを床に置いて、さっそく広げ始めた。

つつい血管の浮き出た腕や厚い胸板に目が行ってしまう。ちらりと彼の黒い瞳がこちらを向いた。

「なに?」

「なんか秀ちゃん前よりも……太くなった?」

「太……お前、そこは遅くなったね、だろ。あっちのやつらジムが好きで、付き合ってたらこうなったんだよ。自分で言うのもなんだけど、今けっこういい身体してるよ。腹もちゃんとバキバキに仕上がってるから」

——見る? なんて悪戯っぽく顔で微笑むので、またもや顔が熱くなる。

「なに言っているの、もうっ」

大人の男の魅力に満ちた美形が悪戯いたづらっぽく微笑むと凶悪なぐらい格好よくて、直視に耐えられず、慌てて背を向ける。

暴れる心臓を抑えていると、いつの間にか立ち上がって距離を詰めていた秀ちゃんが、スッとその長身をかがめて覗き込んだ。

「どうした？」

間近にある精悍せいかんな美貌と腰にクルる低い美声。もうやめてほしい。こっちのライフはとづくにゼロだというのに。

「なっ、なにがっ？ 秀ちゃんこそどうしたの？」

「これ、飲もうと思っ買って買ったから冷やしてもらおうかと。それよか、お前こそこんなところ突っ立っってどうした？」

小首を傾げた美形が、私の赤くなっているであろう頬を指の背で触れて、薄く笑った。

「真っ赤」

「……っ、これは、秀ちゃんが、さっき破廉恥はれんちなこと言ってきたから」

「いや、お前あれくらいで。っつか、あの一言でそんな顔を赤くして、いったいなにを想像してんだよ、このムツツリが」

「……っ！」

ニヤニヤ笑われて、恥ずかしくっしてしようがない。

「コーヒーめちやくちや濃くするね」

恨みがましく見つめると、秀ちゃんが「悪かったっ」と私の頭にポンと手を置く。

こうやって簡単に私に言い負かされてくるところも、自分が秀ちゃんにとって保護対象のままな感じがしてちよつと悔しい。……悔しいのに。どこか喜んでる自分もいて。ほんと、恋心はどうしようもないと思う。

自分の感情を持て余しながら、受け取った袋の中を覗く。赤と白の二本のワインとチーズとナッツが入っていた。

「赤は常温で、白は冷蔵庫でいい？」

「ああ、それでいいよ。今晚開けようぜ」

「今日は和食の予定だよ？」

「別に飲み物はワインでもいいだろ？ 日本食に飢えてるし、真白の料理、楽しみにしてる」

ふわりと爽さわやかな笑みを向けられて、またしても心臓がキュウツと悲鳴を上げた。

それからは何事もなかったように一緒にコーヒーを飲んで、秀ちゃんが荷ほどきをしている間に夕飯の準備を始めた。

今日のメニューは秀ちゃんリクエストの唐揚げ、大葉おおばと柚子胡椒ゆずこしをきかせたトマトと豆腐の和風サラダ、小松菜のお浸しと、肉じゃがと、具だくさんの豚汁とん汁と炊き立てのご飯。

準備を終えて、たくあんとのりの佃煮つくだ煮を小皿に盛ってご飯の横に置いたら、「食いたかった」とすぐ感謝された。わかるよ、実家に帰ったかのような、ほつとするメンバーだよね。

まずはビールで乾杯したあと、「いただきます」と両手を合わせた秀ちゃんが揚げたての唐揚げ

を頬張る。

「この唐揚げ、実家と同じ味がする……」

「昔、おばさんと一緒によく作ってたからね」

「いつの間に」

「秀ちゃんのサッカーの応援に行ってたときに」

あの頃の私は花嫁修業気分でルンルンだったな。秀ちゃんが、私が作るのを手伝ったお弁当を食べるのを見て、奥さんになった気持ちになったりした。——今は勝手に同棲した彼女気分を味わっている。驚くほど自分がなんにも変わっていない。これが三つ子の魂たましい百までもということだろうか。 možy、十年後も自分は変わっていないのだろうか。怖すぎる。

「……おばさんには、よくしてもらったな」

「母さん、真白のこと気に入ってたもんな」

「えへ、嬉しい」

「そういや、クローゼットが半分空いてたけど、服は実家に送ったのか？」

「うん、あんまり使わないのとかをとりあえずね」

「迷惑かけて悪いな」

「ううん。私は別にいいから、家が決まるまでゆっくりしていいってね」

むしろこのまま永久に私と一緒に住めばいい……そんな呪いのような言葉を私は心の中で唱えている。

「無理矢理押しかけてきた俺が言えたことじゃないけど、お前、もう少し危機感を持ったほうがいいよ」

秀ちゃんの顔をまじまじと見返す。

「え……どういう意味？」

「別に。そのまんまだけど」

もしかして、俺も男なんだけど、とかそういうことかな！ 手を出すかもしれないだろ、的な……！ 逆に言えば、私のことを女として見ている、的な……っ！

「俺がこのまま家賃も払わずにヒモのように居座ったりしたらどうするつもりだよ」

そっちな……！ 心中でガクツと項垂うなだれる。

だって、少女漫画とかだとお約束のやつだし！ 期待するよね、普通！

これが現実ですよ。わかっていすとも。凡人にTL展開はやってこないことぐらい。自分の

恋愛脳の残念さに脱力せずにはられない。

「そんなの心配する必要ないよ。秀ちゃんって絶対そういうことしないタイプじゃん」

「まあ確かにそんなことはしないけどな。でも——」

小首を傾げて艶つやっぽく笑った秀ちゃんが、スルリと私の頬を撫でた。

「俺も男だから違う意味で『危ない』ことをしたりするかもしれないだろ」

完全なる不意打ちを食らって、心の中で『ぎいやあああ——っ！』と悲鳴を上げる。

綺麗な目が悪戯いたづらっぽく細められているから、からかわれているんだってわかるのに、顔が熱くな

ることも、暴れまくる心臓を鎮めることもできそうにない。

格好よすぎて反則だ。

「き、禁止……！ からかうの禁止……っ！」

死ぬ！ これ以上は、死ぬ！

身体の前で手をクロスして必死に訴えると、秀ちゃんが声を上げて笑った。

「悪い、悪い、面白いくらい顔が赤くなるから、つい」

ひとしきり笑った秀ちゃんがビールを呷る。私も暴れる心臓と熱くなった顔を誤魔化すようにビールを一気に流し込んだ。

「真白は次どうする？ もうワインいく？」

「いく」

これは飲まないと心臓が持ちそうにない。

「じゃあ俺もワインにしようかな」

「ワインとグラス持ってきます」

キッチンに行つて、高いところに収納しているワイングラスを取ろうと背伸びをする。手を伸ばした先でワイングラスの脚に指が引っかかる。よし、と引つ張つた瞬間、隣に置いてあつたシャンパングラスがぐらついた。

しまった。

咄嗟のことにギョツと目を瞑つたけど、予想していたガラスの割れる音も衝撃もやってこなかった。

「……つぶね」

恐る恐る目を開けて振り返ると、すぐ真後ろに秀ちゃんが立っていた。

背中に感じる彼の体温に、身体が固まる。

「危ないだろ。一緒に生活するんだし、これから高いところの物は俺が取るから」

ただでさえ艶のある声なのに、甘い吐息が耳にかかつて、息ができなくなる。

腕を伸ばしたままの間拔けな体勢で固まっていると、私の左側に彼の手が置かれ――

「真白？」

右側から顔を覗き込まれた。

え、なにこの状況……左側に頑丈な腕があつて、後ろに逞しい身体があつて、私の右側にイケメンの顔があつて……って近い近い近い！ 距離が近い！ これが欧米帰りのパーソナルスペースか！ 大和撫子（笑）にはハードルが高いです！

どうしよう。秀ちゃんのすごくいい匂いに包まれている。微かに香る上質なオーデコロンが大人の男、って感じがして……ああ、もうなんかエッチすぎて無理。

「おい」

秀麗な顔が私の耳元の近くにあつて、腰にクるような声が耳元で発せられて。もうだめ。私、妊娠しちやいそう。

次の瞬間、ふうつと耳に息が吹きかけられた。

「ひあああ……っ！」

ドキドキしすぎて無駄に元気のいい悲鳴が出てしまった。ぷつと笑う声が聞こえて、秀ちゃんの腕がスルリと解かれる。振り返ると、憎らしいほどの美形が肩を揺らして笑っていた。

く、悔しい……！ またからかわれた……！

こっちはドキドキして死にそうになっっているっていうのに。

ジトリとした目で見つめても、余裕の笑顔が返ってくるだけだ。

「怪我なくてよかったな」

引き出しを開けてワインオープナーを取り出した秀ちゃんは、ワインボトルとワイングラスも持って、何事もなかったかのように離れていった。

未だにドキドキしてるせいで動けない私をよそに、秀ちゃんはソムリエみたいに手際よくコルクを抜いて、ワイングラスに片手でサーブする。

いちいち格好いい彼に腹を立てながら、ようやく動けるようになった私は、お皿に移したチーズとナッツを出した。

「あ、チーズとかは空港で適当に買ったやつだから、そんなに期待するなよ」

「社会人一年目には、十分すぎるほど豪勢です」

「そ。ならよかった」

前に置かれたグラスを持つと、秀ちゃんも同じようにスツと持ち上げて、こちらを見る。

「お帰り、秀ちゃん」

「ああ、ただいま」

二人でワイングラスを控えめにチンと鳴らして、口に含む。芳醇ほうじゅんな香りがふわっと鼻に抜け、口の中いっぱいにふくよかな余韻が広がって幸せな気持ちになった。

「美味い」

「だろ？ あつちで飲んだとき、絶対に真白にも飲ませようと思ったんだ」

「すごく嬉しい。ありがとう」

私のことをちよつとでも思い出してくれたってことだもんね！

「それにしてもニューヨークかあ。いいなあ、海外勤務とか憧れちゃう。私は絶対にないもんなあ」

「言葉の壁とか文化の違いとかあって、慣れるまで結構しんどいけどな」

「秀ちゃんでも大変だったんだ」

「そりゃな。あつちのやつらは基本残業とかしないんだよな。でも働き方はすごい刺激を受けた。優先順位がはっきりしてて。一番が奥さんで、二番が家族で、三番が趣味とかで、仕事なんてもつとずつと下だからさ。仕事が残ってても普通にみんな帰ってくんだよ。でも、家族を大事にするそのスタンスはいいなって思った」

「そうだね」

ニューヨークでのことを話す秀ちゃんはちよつと少年っぽい表情で、大人の男性とのギャップにときめきが止まらなかった。

二人でワイン片手に離れていた間のお互いの話とか、親戚の話とか、思い出話とか、とりとめもない話をたくさんした。



気がついたらシンクに空のワインボトルが二本転がっていて、私の秘蔵のワインまで開けている有様だ。

「てか、さつきから思ってたけど、なんでお前はそんな離れたところに座ってたんだよ」

「え？ 離れたところって？」

普通にテーブルを挟んで向かいに座っているだけなのに。

「ほら」

私のワイングラスを取り上げて、自分の横に置いた秀ちゃん。目をぼちぼちさせていると、大きな手が伸びてきて手を引かれる。

「来いよ」

ふわふわと心地よく酔っ払っている私は、なんの疑問もなく、彼にうながされるがまま隣に座る。うっかり、肩と肩が触れ合いそうなほど近くに座ってしまっ、恥ずかしくて、ちょっと横にずれた。

「なんで離れんの？」

「ちょっと、近すぎたなって」

「子どものときはあんなに俺にべったりくっついてたくせに」

「子どものときはね。でも、ほら、今は……」

ワインを口に含んだ彼がふ、と口元を緩める。その表情が妙に色つぼくて心臓が暴れる。

「今はなんだよ」

わかってるくせに、その抜群に整った顔をこちらに寄せてニヤニヤと意地悪く聞いてくるイケメンに目が泳ぐ。

「……お互い、大人になったから」

なんとなく気恥ずかしくて、声が尻すぼみになる。意識しているのは私だけで、秀ちゃんにとっでは、生意気に色気づきやがって、ぐらいの話だったのかもしれない。

「へーえ、随分と慎重いんだな」

「大和撫子やまとなでしこといいまして、平たい顔族の女性は奥ゆかしさを大事にしますの」

「ははっ」

笑う秀ちゃんに、むう、と唇を突き出す。

秀ちゃんがこちらを見つめながら、私の頬にかかった髪の毛を優しく耳にかけてくれる。

「男がいたわりには、全然男慣れしてないんだなって言ってたんだよ」

私の髪の毛を弄もてあそんでいる秀ちゃんに「おとこ？」と首を傾げる。

男ってなんだろう。年齢イェール〓彼氏いない歴の私になに言って……あつ。

そういえば、前に電話で、彼氏は今はいないって見栄を張ってしまっていたんだった。どうしよう、早いうちに訂正しない。

「あ、あのね」

「ん？」

「彼氏、のことなんだけど」



「そういえば、真白、あの紙のこと覚えてた？」  
突然話を遮られて、きよんとする。

「え……紙？」

「そう。これ」

そう言ってポケットから取り出した物を、秀ちゃんが私に見せつけた。  
節くれだった男らしい人差し指と中指の間に挟まれた、古びた紙切れ――  
「そ、それっ！」

思わず手を伸ばすと、ピツと遠ざけられた。

「え……？ な、なんで」

手を伸ばしたまま呆然と見つめると、黒い目が至極楽しそうに細まる。

「俺のだし、それに、これまだまだ使うつもりだから」

「え？」

「ほら」

ぴら、と『なんでもいうことをきくけん』を裏返す。

「え……」

そこには、下手くそな字で『しようかいすう∞ しようきげん∞』と書いてあった。

――秀ちゃんに『∞』を教えてもらったばかりのアホの子の私が、書きたくてしようがなかったのが窺い知れる。

「……ッ！」

もう、悶絶である。本当になんてモノを生み落としてくれたんだ、私は！

秀ちゃんは再び黒い目を細め、ゆつくりと口角を上げた。

「な？」

『な？』 ってなに!? 『な？』 って。

恐ろしいほどにドロついた笑顔の秀ちゃんはすぐく楽しそうだし、ちよつと悪い顔がめちゃくちゃ格好よくてキュンキュンするけど。

「……まだ、なにか、このあとも、使い道が、あるのしょうか……？」

口の中がカラカラである。縫りつくように見つめる私をさらに甚振るように、ゆつくりと目を細める美形。

「男にこんなものを持たせたら、使い道なんてたくさんあるだろ？」

「しゅ、しゅうちゃん？」

胸が高鳴る、主に期待で。

もしかして、今から、えつちな命令とかされるのだろうか。されてしまうのだろうか。いや、しいただけるのだろうか！

「朝起こすとか、ご飯作ってもらうとか、色々と」

なんだそんなことか……がくつと項垂れそうになる。

「それくらい、そんなのなくてもいくらでもするし」

拍子抜けしながら笑みを零すと、秀ちゃんが口角を艶っぽく上げる。

「気前がいいな。それじゃあ、やっぱり一番最初は」

大きな手が伸びてきて私の頬に触れる。彼の親指が私の唇をそつと撫でた。

その仕草に息を止めて固まっていると、濃蜜な男の色香をまき散らした男前が口を開いた。

「真白」

今まで一度も聞いたことがない、甘く低い声音。

「キスして」

「……へ？」

初めて見る雄の顔をした秀ちゃんに、胸が痛いほど高鳴る。

一瞬、なにを言われたかわからなかった。

数拍おいて、言葉を呑み込んだあとは、ますます意味がわからない。

「え？ なに、それ……冗談、だよな？」

「こんなことを冗談で言うわけないだろ」

そう言われても混乱するばかり。

それに、私を見つめる視線も空気もトロリとした甘さを孕んでいて。

こんな秀ちゃんは知らない。本当にわけがわからない。

「イヤ？」

じっと力強く私を見つめる秀ちゃんから視線が剥がせない。もちろん、イヤなわけじゃない。本

音を言えば、大歓迎なぐらい。だけど――

「どうしてもイヤなら諦めるけど、そうじゃないなら……ほら」

「……っ」

うっとり微笑んだ顔が近付いてきて、心臓がより激しく暴れ始める。顎に手をかけられて、上を向かされて。

「ほら、早く」

お互いの吐息が唇を湿らすくらい近くで、端正な顔が止まる。私が少し動けば触れてしまう距離。ど、どうして」

鋭さと男の甘さがほどよく混ざり合った美形が、口角を上げて挑発的な笑みを浮かべる。

「そんなこと俺に聞くなよ」

吐息が口にかかる。間近に迫った顔。熱っぽい眼差し。自分をすっぽりと覆う逞しい身体。濃密な男の色香。初めてのもののばかりで、頭の中がぐるぐるするし、息苦しいくらいに心臓が音を奏でる。

「もしかして、酔ってる？」

「まさか。この程度で酔うわけないだろ。なんだったら明日シラフでも同じことでしょうか」

「明日、シラフでも……？」

「そう、明日シラフでも」

情欲を纏った黒い目が獐犢に細まる。

「俺は焦らされるのが好きじゃないから、早いとこ覚悟を決めたほうがいい」

背に回った手が絶妙なタッチで私の背中を撫でる。ぞくぞくとした甘い痺れが駆け抜けて、ますます思考が鈍くなっていく。

「じゃないと、もっと困ることになると思うし」

「もっと？」

「そう、もっと」

艶っぽく囁く美形に、こくつと喉を鳴らす。

「ほら、早く。残り十センチもないだろ」

そのとおりだ。でも、セカンドキスがこんなシチュエーションだなんて……いや、むしろアリかもしれない。相手が秀ちゃんだと、とたんになんだって嬉しくなってしまう私の恋愛脳では、もはや正解なんてわからない。

硬い指先で、くすぐるように耳の縁を撫でられて、頭の中が霞がかったように白くなっていく。

「俺に泣かされたらいいのなら、このままでもいいけど」

「わ、わかった。する、から……目、閉じて」

「ヤダ」

やだ!? そこは紳士としてこちらのお願いを聞くところでは!?

「お願い、恥ずかしいから」

私の必死の懇願を、うっとりするような艶を纏った囁き声が、愉しそうに「だーめ」と切り捨

てる。

「……っ、なんで」

「見たいからに決まってるだろ？」

形のいい唇が動くたびに、甘い吐息が唇にかかる。それがまるで媚薬のようで、五感が彼に支配されていく。

「ほら、早くしろよ。それとも、やっぱり俺に虐められたい？ お望みならめちゃくちゃに啼かせてやるけど」

熱い息が吹きかかるたびに、もうキスをしている気分になる。それほどに近い距離で見つめ合って、囁き合って。

浅く乱れた息を吐き出し、涙が滲んだ目で見つめて、彼のTシャツに縋りつく私は、きつと欲情した女の顔をしている。

「ほら、早く」

美形が笑みを深めて、さらに顔を近づける。

「真白」

まるで恋人を呼ぶかのように、甘く掠れた声で乞うみたいに名前を呼ばれて、凶暴なほどの彼の魅力に吸い寄せられて――

「ん……」

――自然と自分から唇を重ねてしまっていた。その甘さに身体がふわふわとした喜びでいっぱい

いになる。

「だめだな。——全然足りない」

すぐに、大きな掌が私の後頭部に回る。斜めに傾いた彼の顔が近づいて、もう一度、唇がちゅぷ、と重なる。

ちゅ、ちゅ、と唇を何度も何度も重ねられて、心臓が壊れそうなほどドクドクと音を立てる。

顔が熱くて息苦しい。焦げつきそうなほど熱い彼の視線から目を離せない。

はふ、と息をした瞬間、ぬるりとした感触が口内に侵入してきて、びくつと身体が跳ねた。そのまま固まっていると、大きな掌が私の頭をゆっくりと撫で回し始めた。節くれだった長い指が耳の横から分け入って、何度も何度も梳くように撫でつける。まるで甘やかすみたいなの仕草にうっとりして力を抜くと、私の舌先だけをチロチロと舐めていた秀ちゃんの厚みのある舌が奥に侵入してきて、舌全体を握め捕った。

「ん……ッ」

ねっとりとして、秀ちゃんの舌が私の舌を余すところなく舐め回す。敏感な粘膜同士を、愛おしむみたいに睦み合わせる。

気持ちいい。うっとりとして蕩けた視線の先に、私を力強く見つめる秀ちゃんの黒い瞳があった。その瞳にぎらつく欲が宿っているのを見て取った瞬間、ぞくつと背筋が甘く痺れる。

「ん、んう……は、んっ」

歯列をなぞられたり、口の中をかき混ぜるみたいにくちゅくちゅ口腔粘膜を舐められたり、舌同

士を絡めたり。

秀ちゃんから施される濃密な口づけに、理性なんてあつという間に取り払われてしまった。甘美なキスの気持ちよさに、もうどうにでもしてほしいような淫らな気持ちになる。

十分か、十五分か、時間感覚もわからなくなるくらい、大人のキスをたっぷりと与えられて。その間、私は蹂躪される気持ちよさにひくひくと震え、秀ちゃんに縋りつくことしかできなかった。

解放されたときには、全身の骨が溶けてしまったみたいにくったりと力が抜けて、秀ちゃんにもたれかかり、ぽおっとその整った顔を見つめていた。

濡れて光る唇をべろりと舐め取った美形が小さく笑う。

「なにその顔。もつとしてほしい？」

「ちが、ん……っ」

ちゅ、ともう一度唇を塞がれる。

「違うないだろ。そんな真つ赤な顔で目うるうるさせて」

「だって、秀ちゃんキス、すごい、上手だから」

「やっぱり、キスのおねだりじゃないか」

くすり、と笑われて、恥ずかしくって顔を俯ける。

「キス、よかっただろ？」

そんなこと、素直に答えられるわけがなくって、ますます深く俯くと、ちゅつとつむじに口づけを落とされた。思わず身を強張らせると、ぎゅつと私を抱き寄せた彼が熱っぽい吐息とともに囁

いた。

「いつでもしてやるから、遠慮なく言えよ」

そのドロドロに甘い声に半ば意識を失いそうになっているのに、男前は再び私の顎に手をかけて、顔を上げさせた。

「沈黙は了承ってことでいいんだよな」

スリッと親指で私の唇をなぞって。

熾烈なまでの色香を放って笑みを深める美形に、ときめきと羞恥が限界点に達した。

「くっつ秀ちゃんのばかあ」

半泣きで身を振って秀ちゃんの手から逃れる。縮こまって、真っ赤になっているだろう自分の顔を両手で隠した。

ため息が聞こえて、そっと顔を上げると、自分の前髪をくしゃりと握って乱した秀ちゃんが、眉間に皺を寄せていた。——明らかに後悔している顔で。

こちらとこちらを向いた黒い瞳に先ほどまでの艶っぽさは無い。完全に冷静さを取り戻していた。いつそ白けたとしてもいうように。

「俺、ちよつと風呂に入ってくる。真白はここでゆっくりしてろ」

クッションの上に私を下ろすと、秀ちゃんはお風呂に消えていった。

「……え？」

なに、今の。

もしかして、酔った勢いでしちゃって、冷静になって、後悔している、の？

先ほどまでのキスで高揚した気持ちから一転、今度は泣きたいくらいの不安が押し寄せてきた。

ぐるぐる、ぐるぐる同じことを考えては唇に触れて青くなる。

冷静になったら、イヤだったってこと？ うわあ、妹としちゃったよ、みたいな？

そんな……恥ずかしいけど、すぐく嬉しかったのに！

最初のキス以外は秀ちゃんからしてきたくせに！ しかも、最初のキスも無理矢理させたくせに！

体育座りをした膝に、ぽすっとおでこをのせて、ため息をつく。——もう、わけがわからない。

『ましろ、しゅうちゃんのおよめさんになりたい』

小さい頃、よくそう言って告白しては、『ませガキ』の一言であっさりとフラれていた。いつから告白することはやめてしまったけど、秀ちゃんのことはずっとずっと好きだった。

でも、六歳の年の差は残酷だった。

私が小学校三年生でランドセルを背負つてるときに、中学校三年生の秀ちゃんの周りには綺麗で可愛いお姉さんたちが群がっていた。小学校三年生から見た綺麗なお姉さんたちは、もう絶対的に敵うはずのない相手で。それに、その頃には自分が特別に可愛い子ではないことはわかっていてお家に帰ってこっそり涙した。

『ましろ、いい女になるから。それまで待っててね、先にけっこんしちゃダメだからね』

『いや、俺まだ中学生なんだけど』

『とにかく、すぐけっこんしないでね』

『ほんと、ませガキだよな』

『おねがい、しゅうちゃん。おねがい』

『はいはい』

高校のときの秀ちゃんには、年上の綺麗な彼女がいた。大学以降は知らないけど、それでも自分が恋愛対象外のお子様なのだいつも思い知らされてきた。

眉目秀麗、頭脳明晰、スポーツ万能で面倒見のいい秀ちゃんは、男子からも女子からも人気があつて、いつも大勢の人の中心にいた。眩しくて、誇らしくて、手が届かなくて、切なくて。でも、諦められなくて。

たまにこんな私と付き合いたいと言ってくれる人もいたけれど、秀ちゃんしか目に入らなかった私は、揺らぎもしなかった。

それは、秀ちゃんがニューヨークに行つて、二年間まったく会えなくても変わらなかったし、変われなかった。

でもそれと同じように、秀ちゃんの私への想いが変わるきっかけもこの二年間なかったはずで……

彼が入つていったお風呂のドアをじっと眺めてしまう。

二年ぶりに会った。ただ、それだけ。

「どうして、キスなんて」

この数週間で、何度となく秀ちゃんとキスをする妄想はしてきた。

でも、さすがの私だって、妄想は妄想だと思つていたわけで。まさか実際に起こるなんて、まったく思つていなかったわけで。

「期待してもいいの、かな……」

でも、最後の後悔したような表情が胸に突き刺さる。

落ち着かなくて、ワイングラスを口に運ぶ手が自然と進んでしまう。

恥ずかしくて、嬉しくて、ドキドキして、ぐるぐるして、胸が痛くて。もうなにがなんだかわからない。

## SIDE 秀一

頭からシャワーを被り、水の滴る髪を後ろに撫でつける。

——ヤバいな、しくじった。

何度目かのため息をつき、「ガキか」と独り言ちる。

初日からここまでするつもりなんて毛頭なかった。なに、すっかりキスなんかしてんだ。

『彼氏は……今は、いない、けど』

その事実を聞いた瞬間の苦々しさは、生涯忘れないだろう。

二年も離れていたんだし、年齢も年齢だ。いてもおかしくないことはわかってきたのに。実際、控えめな性格だから目立たないだけで、真白は整った容姿をしている。

雪のように白い肌と艶やかな黒髪、黒いブラウス、すらりとした脚を包むタイトなジーンズ。シンプルな格好が、積もったばかりの雪のような彼女の綺麗さを引き立てていた。

真白の灰色がかった黒の印象的な瞳と目が合って、微笑まれた瞬間、二年前よりずっと綺麗になったな、と思った。

俺がない間に、こんな風にあいつを綺麗にさせた男がいると思うと、反吐が出るような気分だ。真白は、男ばかりの俺の親戚の中で唯一の女の子だった。

最初は祖父母の家に行くとき必ずいるな、程度の認識だった。ちまちましたのに懐かれたから普通に可愛かった。当時の俺にとっては、ただそれだけの存在だった。

おかしいなど気づいたのは、親戚で集まった日の夜に、大人たちが真白のことで話し合いをしているのが聞こえてきたからだ。聞いていても楽しい話でもないでその場を去ろうとしたら、少し離れたところに小さな存在がいるのに気がついた。

——ヤベ。

明らかに真白に聞かせてはならない話だった。ヒートアップした大人たちの会話は、真白を邪魔者扱いして押しつけ合うような様相になっていたからだ。

——ああ、クソ。理解してなきゃいいんだけど。

その微かな希望は、真白の横顔を見たときに打ち砕かれた。

泣いてはなかった。

悲痛そうでも、落ち込んでもいなかった。

ただ無垢な大きな瞳でじつと大人たちを見つめていた。

それでも、まだ四歳かそこらのこの少女が、なにを言われてるか理解してしまっているんだと、直感でわかった。

真白、と呼びかけると、くりつとした大きな瞳がこちらを向いた。

「あっちに行こう」

真白は頷いて、素直についてきた。

それから、できるだけ構ってやった。

真白の両親は、いつまで経ってもカップル気分で、“親”になりきれない人たちだった。

両親からの電話に出ては、目にいっぱい涙を溜めて、早く帰ってきてね、と伝える真白を見て、ガキの頃の俺はいつも居た堪れない気持ちになった。それでも、あいつはずっと“いい子”だった。祖父母にも両親にもわがままを言わず、なるべく面倒をかけないように、部屋の片隅で静かに絵をかいて一人で過ごしている“手のかからない子”だった。

『寂しくないのか？』

まだあいつが小学校低学年ぐらいのときに、そう聞いたことがあった。その頃には、ブンブン揺れる尻尾と耳の幻が見えるくらい真白から懐かれていたから、寂しいという本音を言っただけでもらえるものだと思っていた。



『お父さんとお母さんから、なかまはずれにされちゃうのは、やっぱり、さみしい、かな』  
『俺からおじさんたちに言つてやろうか』

『ううん、だいじょうぶ。さみしいけど、その分いいこともたくさんあるから』

『いいことって?』

『しゅうちゃんにあえる!』

『可愛いこと言ってくれるじゃん』

小さな頭を撫でると、ふにやふにやと嬉しそうな顔で笑う。

『あとね、おじいちゃんとおばあちゃんといっしょにいられるでしょ、おばあちゃんのごはんおいしいでしょ、おばあちゃんとオヤツつくるのたのしいでしょ、おじいちゃんとお庭いじりするのたのしいでしょ、お庭でひみつきち作るのたのしいでしょ』

指折り数えながらキラキラした目で話し続ける真白を見て、喉が詰まった。

純真な笑みを浮かべ、両手で数えきれなくなってもなお、小さな嬉しいことや小さな楽しいことを口にし続けるその姿に、なにも言えなくなった。

もっと同世代の子どもたちみたいに親にわがままを言っていんだって言ってやりたかった。欲しいものをねだったり、外出をねだったり、一緒に遊んでくれて言っただっていいんだって。

こんな小さな子が両親から自分だけのけ者にされて辛いはずがない。

それでも、間近で見てきた自分には——よくわかった。自分の隣に座るこの小さな女の子が、辛い環境でも、そこに心から楽しみを見出す強さを持っているのだと。

両親から普通に愛情を注がれて、まっとうに育てられた自分に、小さな真白の在り方が突き刺さった。

今にして思えば、このときから真白が俺の中で特別になっていたのだろう。

俺が大学生になつてからも、兄として誕生日を祝つてやつたり、食事に連れて行ってやつたり、一緒に買い物について行ってやつたりした。

どんどん綺麗に成長していく真白を見て、俺の妹だし当然の結果だな、なんてふざけたことを思っていた。

そんな俺が男として真白を好きだと自覚したのは、ニューヨークに行く直前だった。

ニューヨーク赴任が決まり、引き継ぎや準備で忙しく過ごしていたあの日、会社で残業していると珍しく真白から電話がかかってきた。

『——しゅうちゃん、たすけて』

少し呂律の回っていない声と後ろから聞こえる賑やかな音に大体の事情を察した。酒が飲めるようになったばかりの年頃だ。どこかの馬鹿が酒にまかせて盛ろうとしているに違いない。

『わかった。今どこだ。……そこなら、十五分くらいで着くと思うから』

ありきたりな雰囲気飲み屋に着いて、通路を歩きながら電話を鳴らす。音が聞こえたほうに向かって進んでいくと、真白が男に肩を組まれて縮こまっていた。身体を守るように両腕を組んで涙目になっているのを見て、自分でも信じられないくらいに頭に血が上った。

『悪いな、そいつ酔っちゃったみたいだ』



相手の男を殴り倒したい衝動を噛み殺し、自分の外見を最大限に活かした紳士的な笑みを向けると、こちらを睨<sup>にら</sup>んでいた男どもの氣勢がそがれる。見ると、相手にもならない、粹<sup>いき</sup>がった学生どもだった。

ちらりと真白を見ると、あからさまに安堵して、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

誰にもバレないように小さく息を吐き出す。連れ帰りたいのは真白だけだが、彼女の救援要請には周りの友人も含まれているはずだ。

『これ、こいつらの参加費な。迷惑かけたな』

財布から万札をそれなりに抜いてテーブルに置くと、ガキどもの態度が変わった。

『えっ、こんなにいいんすか!?』

盛<sup>さか</sup>った貧相な猿どもに内心冷めた目を向けつつ、につこりと友好的な笑みを浮かべる。

『こいつら連れて帰っちまう詫<sup>わ</sup>びだ。悪かったな、それで楽しんでくれ』

口角を上げてその場を去ったが、内心は全員殴り倒したいくらいに苛<sup>いら</sup>立っていた。

『しゅちゃん、ごめんね』

とろんとした瞳、赤らんだ顔、舌足らずな話し方。こんな隙だらけの姿をアイツらに晒<sup>さら</sup>していたのかと思うと、さらにドロリとした怒りが腹の底から湧き上がってくる。

『説教は明日だ。とりあえず、怖<sup>こわ</sup>かったな』

肩を抱き寄せてやると、瞳を潤<sup>うる</sup>ませてすんなりと腕の中に収まった。そのことでほんの少しだけ怒りが鎮<sup>しず</sup>まったが、それでも怒りがフツフツと湧き上がるのを止められない。真白が他の男に触れ

られていたことが、どうしようもなく気に食わない。

生まれて初めて感じる強烈な独占欲と支配欲。

必要以上に煮え滾<sup>たぎ</sup>る怒りの中で、俺はやつと自分の気持ちに気がついた。

ニューヨークに行く前にいつそのこと籍でも入れてしまったかったが、当時は仕事の引き継ぎや引越しの準備に追われて口説く時間がまったくなかった。結局、俺は真白に「二度とコンパには行くな」ときつく叱<sup>しか</sup>ることくらいしかできなかった。

ニューヨークに行つてからはたまに電話をし、誕生日やクリスマスをお口に、その辺の男には手が出せないようなハイブランドの品を送りつけた。真白が喜んで使ってくれればいいし、そうでなくともほんの少しでも男避けになることを願つて。

……いったいなにをしてるんだ、俺は。我ながら健<sup>けん</sup>気<sup>げ</sup>すぎて涙が出そうだった。好きな女相手にこんなことしかできないだなんて、馬鹿馬鹿しすぎる。

ニューヨーク赴任が決まったときは出世コース確定だとほくそ笑んでいたのに、その頃の俺は俺をニューヨークに飛ばした上司を恨んでさえた。

結局、ニューヨークのやつらにワーカーホリックだとバカにされるくらい働いて、真白に会っためだけに誰もが納得する成果を上げて、通常よりも早い帰国を願い出た。

『彼氏は……今は、いない、けど』

聞いた瞬間、スマホを握り壊しそうなほど、苦い思いが込み上げた。それでも、今いないなら奪う手間が省けてよかった、と自分を納得させて帰国してみれば、好きな女の部屋中に他の野郎のい

た痕跡<sup>こんせき</sup>が散らばっていた。

ペアのスリッパに始まり、クッション、マグカップ、茶碗、箸置き、皿、歯<sup>は</sup>ブラシスタンド……俺<sup>おれ</sup>がいない間にさぞ楽しい生活をここで送ったことだろう。

なるべく大人として振る舞おうとしても、どうしても目につく他の野郎<sup>おのりやう</sup>の痕跡<sup>こんせき</sup>に苛<sup>つ</sup>立ち募<sup>も</sup>るばかりだった。

一緒に酒を飲みながら、向かいに座る真白<sup>ましろ</sup>に目を向ける。

胸<sup>むね</sup>下までの艶々<sup>えんえん</sup>した細く柔らかな髪、黒目<sup>くろめ</sup>がちの大きな目、長い睫毛<sup>まつげ</sup>、柔らかそうな頬。さくらんぼ色の形のいい口に、小さな顎<sup>あご</sup>からすらっとした首すじ……黒いレースのトップスから透ける肌の白さ。

綺麗になった。それに、二年前よりもうんと色っぽくなった。

腕や脚はすらりと細いの<sup>に</sup>ふわふわと柔らかそうで、思わず触れてみたくなる。

成熟した大人の女の身体をしておきながら、ガラスのように透きとおった雰囲気<sup>ふんいき</sup>があつて、そのアンバランスさが、男の本能と征服欲<sup>せいぷく</sup>をこれでもかと刺激<sup>しき</sup>してくる。

「ちよっと、近すぎたなって」

「子どものときはあんなに俺<sup>おれ</sup>にべったりくっついてたくせに」

「子どものときはね。でも、ほら、今は……」

潤<sup>うる</sup>んだ瞳<sup>とら</sup>、紅潮<sup>こうしう</sup>した頬、ふっくらとした唇。すぐそばから香る、甘く堪<sup>た</sup>まない匂い。

「今はなんだよ」

「……お互い、大人になったから」

恥<sup>は</sup>ずかしそうに目が伏せられると、長い睫毛<sup>まつげ</sup>が微<sup>かす</sup>かに揺れた。

俺<sup>おれ</sup>がいない二年の間に、他の野郎<sup>おのりやう</sup>の手によってこの色気を引き出されたのだ。

他の野郎<sup>おのりやう</sup>がこの白い肌を暴<sup>は</sup>いて、真白<sup>ましろ</sup>を女にしたのだ。殺してやりたい、と思った。同時に、自分もその白い肌を貪<sup>むさぼ</sup>りたいとも。腹の内<sup>はら</sup>でそんなことを考えている俺<sup>おれ</sup>の前で真白<sup>ましろ</sup>は頬を染めて、このこと切り出した。

「彼氏<sup>カノコ</sup>、のことなんだけど」

この期に及んで俺<sup>おれ</sup>の前で他の男の話をするのか。

そんな理不尽な怒りとともに癡<sup>どう</sup>猛な感情に支配された結果が、この暴走だ。

真白<sup>ましろ</sup>に無理矢理キスをさせ、それでも足りずに真白<sup>ましろ</sup>の口内<sup>くち</sup>を蹂躪<sup>じゆうりく</sup>し、甘い唇を味わい尽くした。

「ん、は……っ、んうう……っ」

男<sup>おとこ</sup>がいたとは思えないような初<sup>はつ</sup>心な反応と、初めて見る淫<sup>みだ</sup>らで可愛らしい姿。抵抗するどころか必死に受け入れようとして俺<sup>おれ</sup>に縋<sup>すが</sup>りつくその可愛らしい媚態<sup>めいたい</sup>に、暴力的なまでの苛<sup>つ</sup>立ちはすっかり鳴りをひそめた。——このまま勢いにまかせてなにかも奪<sup>うば</sup>うのは簡単だ。少しとろくて、お人好<sup>おんごう</sup>しで、優しい真白<sup>ましろ</sup>のことだ。きっと最後には受け入れてくれるだろう。でも、そうやって真白<sup>ましろ</sup>を手に入れたいわけじゃない。

唇を解放してやると、真白<sup>ましろ</sup>は肩で息をしながら、ぽおっと上気した表情で俺<sup>おれ</sup>をじつと見上げた。うるうる<sup>うるうる</sup>と蕩<sup>とろ</sup>けきった瞳<sup>とら</sup>。ぼってり赤く腫<sup>は</sup>れた唇は力なく半開きになっている。その蠱惑<sup>こわく</sup>的な姿に